

諸行無常

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす、とは平家物語の冒頭にある有名な文章ですが、あまりに有名な為、諸行無常というと、栄華を誇っているものもいつか衰える、と言うように捉えられてしまっていますが、本来の諸行無常は、決してそれだけの意味ではありません。

ここで言われる「諸行」とは、この世界で経験の出来る全てのものという程の意味であり、また「無常」とは、それらは全て常に移り変わり変化しているということです。

私たちは、ともするといつまでも変わらないものを求めますが、その為に苦しみを生んでいると看過されたのがお釈迦様です。いつまでも若くありたいと思う為に、年老いていく事を悩み苦しみにしてしまいます。いつまでも生きていきたいと思いつつも、いつかいのち終わっていかなければならない我が身のはかなさに悲観してしまいます。

そうではなく、いつか年老いていく事実、いつか命終わらなければならない事実。そこを正しく見つめて、だからこそ限りあるいはのちを大切に、一瞬一瞬の時間を大切に生きていかなければならぬ、と教えてくれているのが、この「諸行無常」という教えです。